



令和4年度 教育研究所への招待

問い続け、学び続ける教育研究所

信濃教育会 会長 武田 育夫

「あの子はなぜあんなことを言ったのだろうか」「どうしたらあの子の思いに近づけるのだろうか」は、教職の道をあゆんでいると、多かれ少なかれ感じる思いである。子どものことをもっと知りたい、という子どもへの関心が教師を専門職たらしめているのかもしれない。

もともと、一人の人間のことを知る、などということは大それたことであるし、たどり着ける願望ではない。しかし、あの子のことを知りたいと思うことは、教師の“さが”でもある。

信濃教育会教育研究所は、そういう迷える教師、悩める教師、問い続ける教師の集う場であると自負する。このような研究所は全国に類がない。そのことがまた本研究所の存在価値でもある。研究員の研究・研修を支えるスタッフをはじめ、上質の環境を用意している。また、何よりも研究・研修にとって重要なことは「自由」である。これもまた、本研究所が大切にしてきた理念である。

是非、多くの皆さんに教育研究所で研究・研修をしていただきたい。また教育研究所の諸事業に参加し、ともに学んでいただきたい。



令和3年度「教育研究所発表会」



「淀川遠足」 淀川茂重先生の実践を歩く



オンラインによるテーマ研究会



令和3年度「1年次中間報告会」グループ別協議

信濃教育会教育研究所

〒380-0846 長野市旭町1098

TEL:026-232-7169 FAX:026-232-1188

新型コロナウイルスの世界的な感染拡大が始まって3年以上経っても一向に収まりそうもないまま、新年度を迎えております。ウィルスというのは、生物と無生物の間のような存在（構造体）で、それ自体は増殖（自己増殖）せず、ただ多様な生物がそれに「触れる」ことで対象生物を感染させることで「増殖」（拡散）するという不思議な物質です。

コロナウィルス感染拡大におびえる今日このごろ、「感染」というと「おそろしい、絶対ダメ」というイメージをもってしまいがちですが、実は、「感染」は教育にはむしろ欠かせない重要なキーポイントなのです。

それは宮台真司が『14歳からの社会学』（世界文化社、2008年）で、自分自身の「学び」について、次のように語っていることにあります。自分の学びの動機付けは、「人に勝つという競争動機（能力指向）」もあったし、物事を理解したいという理解動機（探求指向）もあったけど、圧倒的に強く動機づけたのは「自分もこういうスゴイ人になりたいという感染動機」だったと述べています。そのあと、彼がノーム・チョムスキー（数理言語学者）、小室直樹（思想家）や廣松渉（現象学者）にいかにか「惚れ込んだ」かについて語った後、“彼らの知識ひとつひとつは、問題じゃない。書かれた書物をもふくめた「たたずまい」を見ていると、突如「この人は絶対にスゴイ」としびれる瞬間が訪れる。それが訪れてからは、「その人だったら世界をどう見るのか」をひたすらシミュレーションするだけだ。”と述べています。

こういう「感染力のある」人というのは、他者の中に自らを「感染させる（自己増殖する）」ことは一切しません。つまり、他者に「自分のように振る舞わせよう」としているわけではないのです。その人に「触れた」（「出会った」）人が、（勝手に）感染してしまうのです。

これって、本当の「教育力」じゃないですか。本当の教育力のある人は、「教えよう」とは一切しない。出会った人が（勝手に）「教えられてしまう」（「教育されてしまう」）のです。こういう教師って、理想ですよ。でも、そういう教師は、実は宮台真司のように、「感染されやすい」に違いありません。たくさんの優れた人物に「感染されて」、感染力が身についているのでしょう。

新しく、本研究所研究員になられたみなさんは、研修を通して、さまざまな人たち（教室の子どもたちを含めて）に、大いに「感染されて」ください。研修を通して、たくさん、たくさん、「感染された」ときは、（図らずも）、あなた自身、多くの他者（子どもたちを含めて）を感染させる「感染力」が身についているはず。さあ、「感染されるぞ」と覚悟をきめて、研修に入られることを期待しています。

教育研究所のスタッフ



所長
佐伯 胖



特任所員
松木 健一



特任所員
岩川 直樹



特任所員
奈須 正裕



特任所員
高柳 充利

所員 熊谷 久仁彦

滝沢 克子

事務職員 滝澤 花奈子

教育研究所の運営

本研究所は、各都市・大学の教育会からの運営委員16名により運営委員会が構成されています。広く教育現場の実践的な課題に応え、自主的に企画運営され「教育の刷新と充実」を目指しています。

長野県教育委員会の公募・選考による研修員は、1年目にはこれまでの自分の実践を振り返ることで課題を明らかにし、協力学級・協力施設等での実践を通して研究をまとめていきます。また2年目には、現場において実践研究を深め、これを論文としてまとめます。

研究テーマ

- 第1テーマ：教師と子ども、子ども相互の関係づくり
- 第2テーマ：子どもの学びが深まる授業づくり
- 第3テーマ：今日的な課題に対応する多様な学び

研究所の主な研修

研究所へ入所した研究員は、研究会等で相互に学び合い、自己の課題を明確にし、研究を焦点化していきます。現場に戻った2年目は、毎月1回のペースで自分の授業実践事例を持ち寄り、共同で検討し合い自分の実践課題を掘り下げます。主な研修は次のとおりです。

新しい教育の実践者・研究者に学ぶ	新たなことに挑戦するマインドと行動力を育成する 先進校・実践校視察、特任所員への随行研修、公開研究会への参加
実践の「振り返り」と同僚との「学び合い」	「振り返り」と「学び合い」から実践者たる教師のからだをつくる テーマ研究会 授業記録・VTR等を通じた自分の実践との向き合い 学び合いを通して研究レポートの作成 省察を深め、見識を広げる研修 所長講義（年5回）、特任所員講義（各年2回） 所長・特任所員による土曜公開講座（年4回）
学校ではできない学びの経験を積む	幅広い見識と人とのつながりを築く 土曜公開講座 研究所が主催するオープンな研修会 その他 学校外の人との交流

研究発表会

研究員は、2年間の実践研究の成果を研究紀要にまとめ、3年目に県内で発表し現場への還元を図ります。

今年度は第74期研究員の発表を行います。

	地区	期日	会場
第1回	東北信A	6月18日（土）	千曲市立東小学校
第2回	東北信B	7月9日（土）	長野市立南部小学校
第3回	中 信	7月16日（土）	木曾町立日義小学校
第4回	南 信	7月23日（土）	飯田市立伊賀良小学校

土曜公開講座

広く全ての学校現場の教職員を対象として、講話や参加者の授業実践等を通して学び合うとともに、教育研究所と学校現場との交流を深めます。

	期 日	会 場	講 師
第1回	5月14日（土）	信濃教育会館	佐伯 胖 所長
第2回	9月3日（土）	信教生涯学習センター	松木健一 特任所員
第3回	10月22日（土）	信濃教育会館	岩川直樹 特任所員
第4回	12月17日（土）	信濃教育会館	奈須正裕 特任所員

教育研究所のあゆみ

昭和 18 年	教育研究所の創設に先立って、県独自の現職教育制度である内地留学制度が発足。県視学清水利一の「教員を現職のまま勉学修業させる道を開きたい」、それは「長野県教育の進展に不可欠のことである」との提言を県出身の岩波茂雄、西尾実、務台理作等が支援し、県教育行政担当者の協力により先駆的な現職教育が実現
昭和 22 年 4 月	終戦後「信濃教育会は、独自の構想のもとに教育研究所を創設すべきである」との意見が会員の間に高まり、清水利一、上条茂、久保義幸等からなる設立委員会により「県内に根をおろし、現場の実践的課題を研究対象とする現職教育の場」としての教育研究所を信濃教育会と県教育委員会とのパートナーシップのもとに創設。初代主任は小出武
昭和 23 年	教育研究所紀要の発行開始
昭和 24 年	県教育委員会より委嘱された「長野県カリキュラム実験試案」完成
昭和 26 年 4 月	専任所員に長坂端午着任
昭和 27 年 4 月	初代所長に長坂端午就任
昭和 31 年 4 月	教育研究所新館落成
昭和 32 年 4 月	主任に浜田陽太郎就任
昭和 33 年	教育研究所年報の発行開始
昭和 35 年 4 月	第二代所長に上田薫就任
昭和 39 年 7 月	研究所創設以来の研究業績に対して第 13 回読売教育賞を受賞
昭和 44 年 6 月	第三代所長に五味美一就任
昭和 58 年 6 月	信濃教育会館新館落成にともない同館 4 階へ移転
昭和 63 年	信濃教育会教育研究所研究年報の発行開始
平成 元年 9 月	第二部門発足 国語、算数・数学に関する基礎学力調査開始
平成 3 年 4 月	第四代所長に上田薫就任
平成 6 年 4 月	第五代所長に松林大就任
平成 7 年 4 月	研究期間を 2 年間とし、1 年次は研究所、2 年次は各在籍校で研究、3 年目に研究発表の体制となる
平成 9 年	信濃教育会教育研究所研究紀要の発行開始
平成 10 年 4 月	第二部門で「心の問題」に関する調査研究開始（学力調査事業終了）
平成 13 年 4 月	第六代所長に稲垣忠彦就任
平成 13 年 7 月	「公開研究会」開始 平成 23 年をもって終える
平成 15 年 1 月	我楽多文庫開設
平成 15 年 4 月	「第二土曜の会」開始 平成 23 年をもって終える
平成 16 年	県内 4 地区での研究発表会と同日同会場で公開研究会開催
平成 18 年 4 月	研究所研修員派遣停止（第 60 期 0 名） 雑誌「信濃教育」へ「教室の窓を開く」連載、平成 23 年 3 月まで
平成 18 年 8 月	「夏の公開ワークショップ」開始 平成 22 年をもって終える
平成 19 年 4 月	研究所研修員派遣再開（第 61 期 8 名）
平成 20 年	第 60 期生不在のため、2 年次（61 期）と OB により研究発表会を行う
平成 21 年	研修員派遣停止後、初の 3 年次（61 期）による研究発表会
平成 24 年 4 月	第七代所長に佐伯胖就任
平成 25 年 8 月	「実践を語る会」開始
平成 28 年 4 月	教育研究所開設 70 年目を迎える 教育研究所研究紀要第 20 巻発刊
平成 28 年 5 月	関東地区教育研究所連盟長野大会において研究報告を行う
平成 29 年 4 月	信濃教育会教育研究所運営規程一部改訂
平成 30 年 4 月	研究テーマを 5 つから 3 つに統合 研修員が 8 名から 6 名になる
令和 3 年	「土曜公開講座」開始
令和 4 年	平成 18 年度以降「研修員」としていたが、設立当時の「研究員」に戻す